

Title	英語による授業担当者の悩みに関する考察 : ティーチング・ティップス集作成の実践報告
Author(s)	中野, 遼子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2021, 25, p. 37-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79101
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

英語による授業担当者の悩みに関する考察

— ティーチング・ティップス集作成の実践報告 —

中野 遼子*

要 旨

英語による授業担当者が抱える悩みを明らかにするため、国際交流科目担当教員・TA対象のFD研修において、参加者に悩みとその解決策を挙げてもらい、それを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を援用してカテゴリー化を行った。その結果、悩みを18のカテゴリーと3つの大カテゴリー、具体的には、〔授業内容に関する悩み〕、〔学生に関する悩み〕、〔教員の悩み〕に分類することができた。さらに、それらを上位の最終的カテゴリーで包括し、最初の2項目を「授業研究関連」、残りの1項目を「授業運営関連」として整理した。解決策に関しては、FD研修で収集できたデータを、先行研究の知見を考慮しながら、上記の悩みカテゴリーをもとに整理した。最終的には、「英語で国際交流科目を教えるためのティーチング・ティップス」として図示することで、国際交流科目特有の悩みが明らかになった。

【キーワード】 英語による授業、ティーチング・ティップス、留学生、日本人学生、大学の国際化

1 はじめに

2019年5月1日現在、日本の高等教育機関における留学生数は312,214人となり、留学生30万人計画が達成された（文部科学省、2020a）。このような高等教育の国際化は受け入れ留学生数の増加だけでなく、授業方法・内容の国際化にまで及んでおり、各大学において英語による授業の実施が進められている（山本 2011）。大阪大学でも、留学生向けの英語による授業（以下、国際交流科目）をはじめ、様々な専門科目が英語で開講されている。しかし、英語による授業の実施に負担を感じる日本人担当教員は少なくない（北浜・近藤 2002；中井 2009）。

そこで、国際教育交流センターでは、国際交流科目の担当者を対象に各学期開始前に1回、計年2回のFD研修を実施している。本稿では、そのFD研修の際に、全学教育推進機構教育学習支援部の佐藤浩章准教授の監修のもとで実施された「ティーチング・ティップス集作成ワークショップ」に焦点を当て、

その際、得られた英語による授業特有の悩みやその解決策を整理・分類して提示する。

2 先行研究

2-1 授業評価関連研究

本研究に関連のある先行研究として、まず、授業評価関連研究が挙げられる。

近年、多くの大学で、FD (Faculty Development) 活動が実施されており、その中でも特に頻繁に行われているものが学生による授業評価である（牧野、2005）。そのため、ここでは、学生による授業評価の規定要因に関する先行研究について述べる。

星野・牟田（2003）によれば、教員との「コミュニケーション」が「学生の努力」を促していることが明らかとなった。牧野（2005）は、授業概要を受講生に事前に認知させることで、授業評価が向上することを解明した。阿久津（2014）は、評価の高い授業は、話し方が明瞭で聞き取り易い、よく準備さ

* 大阪大学国際教育交流センター特任助教

れている、学生の理解に配慮して適度な分量と速さで進む、という3つの特性をもっていることを明らかにした。

2-2 英語による授業に関する研究

次に、英語による授業の先行研究について検討する。文部科学省は2000年代に入って、大学等での英語による授業の普及を推進させてきた(山本 2011)。しかし、太田(2011)によれば、日本の高等教育機関における授業科目と教育課程の英語化に関しては、ヨーロッパ、そしてアジア諸国と比較しても普及が遅れているという。2018年現在、国内では305の大学が、学部段階において英語による授業を実施している(内訳は、国立62、公立28、私立215、日本の大学総数の41%) (文部科学省、2020b)。そして近年、栗田(2017)や早瀬(2017)のような英語による授業の実践報告と、日本における英語による授業の問題点を指摘する先行研究が多く見られるようになった。例えば、北浜・近藤(2002)は、担当教員の多くにとって英語による講義が負担となったり、また遅刻や授業中の飲食といった日本と異なるアカデミック・カルチャーや授業態度に対して教員が不快な思いをしたりする点を挙げている。山本(2011)も、英語による授業準備の負担と、さらに、母語ではない英語で授業を行うことにより学生の理解度を低下させている点を指摘している。また、山川他(2015)は、教員の英語の聞き取りやすさに差があることを英語による授業の問題点として挙げている。

そして、上記のような問題の解決策として、北浜・近藤(2002)は、視覚教材の適切な利用と、双方向型の授業の設計を提案している。中井(2009)は、英語で教える際の秘訣に関して、1) 完璧な英語を目指さない、2) コースの全体像をしっかりと設計する、3) コミュニケーションの手段を増やす、4) 授業での学生の参加を促す、5) 学生の英語力の多様性に配慮する、という5点を提言した。

中野・伊藤・近藤(2020a)は、9年間にわたって留学生を対象に実施された国際交流科目の授業評価アンケートを、SPSSを用いて分析した。その結果、英語による授業を担当する教員にとって、1) 学生からの質問に対して適切に回答すること、2) 日本人学生との交流機会を提供すること、3) 学生とのコミュニケーションを重視すること、4) わかりやすく適度な声で話すこと、5) 授業の見通しを工夫すること、

という5点の重要性が明らかとなった。

一方、国際交流科目に対する日本人学生の満足度は、1) 理解しやすい授業内容、2) 国際感覚・異文化理解の促進、3) 教員の熱心さ、4) インタラクティブな授業、5) 教員への質問のしやすさ、6) 明確な評価基準、7) シラバスに沿った授業、の順に影響が高く、ここから、日本人学生は英語学習や異文化理解の向上のために、理解しやすい授業内容を期待していることが明らかとなった(Nakano, Ito, Nakamaru & Kondo, 2020)。

3 調査方法

3-1 国際交流科目

調査方法を述べる前に、国際交流科目について簡潔に説明する。国際交流科目は、1996年に設置された英語による交換留学プログラム「OUSSEPプログラム」の学生を対象に開始された授業である。OUSSEPプログラムの学生には、IELTSスコア6.0以上もしくはTOEFL iBT80以上を保持することがプログラムの参加要件として課せられているが、日本語の語学要件は定めていない。また、プログラムの修了要件は1学期につき14単位を取得することであり、そのうち2単位については国際交流科目以外の授業も受講可能であるが、残り12単位は国際交流科目の中から選択して取得することが義務づけられている。

また、OUSSEPプログラムは全学プログラムという性質上、参加学生の学年および専攻は様々である。そのため、国際交流科目は、英語による教養科目という位置付けとなっている。日本人学生の受講も推奨しているが、現段階では、卒業要件科目にはなっていないこともあるためか、日本人学生の割合は国際交流科目の受講生総数のうち16%に止まっている(中野・伊藤・近藤、2020)。

上記のことから、国際交流科目は、1) 国際交流が中心、2) 専門性よりは教養(幅広い知識)、3) 多様な考え方を学べる、4) 多様な考え方の中で自分の意見が言える、5) 出身大学ではできない体験ができる、という5点の特徴があるといえるだろう(図3)。また、ティーチング・ティップスの作成にあたり、佐藤准教授から助言をいただきながら、国際交流科目の目的を新たに書き直したので、図3に示す。

3-2 調査方法

調査方法については、まず、2018年4月の「国際交流科目担当教員・TA 対象FD研修」において、佐藤浩章准教授により実施された、「国際交流科目 Teaching Tips 集作成ワークショップ—国際交流科目担当者お悩みアレコレの解決に向けて—」と、同年9月に、佐藤准教授監修のもと、筆者が実施したFD研修「国際交流科目 Teaching Tips 集作成ワークショップ—解決策編」において、国際交流科目を実施する際の悩みとその解決策に関する参加者の回答を収集した。参加者数は、4月のFD研修では計7名（うちTA1名）、9月は計9名（うちTA5名）であった。

具体的な研修内容に関しては、4月FD研修では、まず、参加者に国際交流科目を担当する際の悩みを付箋に思いつく限り書いてもらい、その後全員で、挙げられた悩みをカテゴリごとに分類した。次に、カテゴリごとの解決策を、各自考えてもらい全員で共有した。9月FD研修では、4月の研修の続きとして、分類された悩みに対する解決策を参加者に自由に付箋に書いてもらい、それらの解決策をカテゴリごとに分類してもらった。最終的には、28の悩みと、141の解決策を収集できた。

3-3 分析方法

4月と9月の2回の研修において収集された回答データを、木下（2007）を参考にして、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を援用しながら、筆者がさらに整理・分類・分析を行った。具体的には、悩みに関するデータに対して、カテゴリ、大カテゴリおよび最終的カテゴリという段階的なコーディングを行った。

解決策については、分類した悩みをもとに、その回答に当たるものを整理・分類した。その際、先行研究、特に国際交流科目の学生による授業評価アンケートの調査結果（中野ら、2020；Nakano et al., 2020）も考慮に入れて検討を行った。次項では、結果と考察について述べる。

4 結果と考察

上記2回のFD研修で挙げられた国際交流科目の悩みを整理・分類した結果、最終的に、18の〈カテゴリ〉と、3つの〔大カテゴリ〕、そして、2つ

の「最終的カテゴリ」に分類することができた。具体的には、〔授業内容に関する悩み〕、〔学生に関する悩み〕、〔教員の悩み〕の3つの大カテゴリと、「授業研究関連」と「授業運営関連」の2つの最終的カテゴリである（図4）。図の矢印は、3つの悩みが互いに影響し合っていることを示している。

解決策については、18個の悩みに対する回答になるよう整理・分類した結果、図5から図9のようになった。結果のうち、各悩みの後ろの（ ）内の数字は回答者数であり、◆印と下線のついた解決策は研修では回答がなかったが、先行研究で述べられていたものである。以下、大カテゴリ別に、結果と考察を簡潔に述べる。

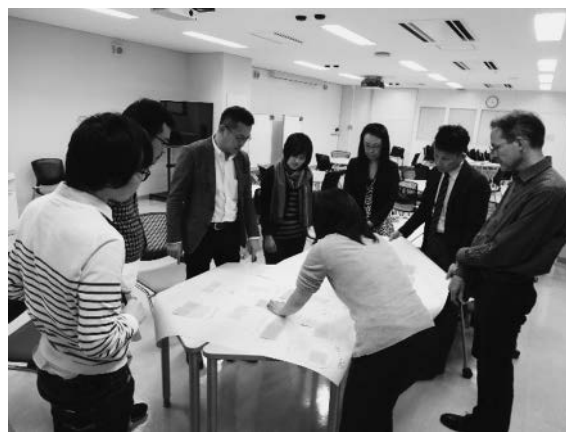


図1 4月FD研修の様子



図2 9月FD研修の様子

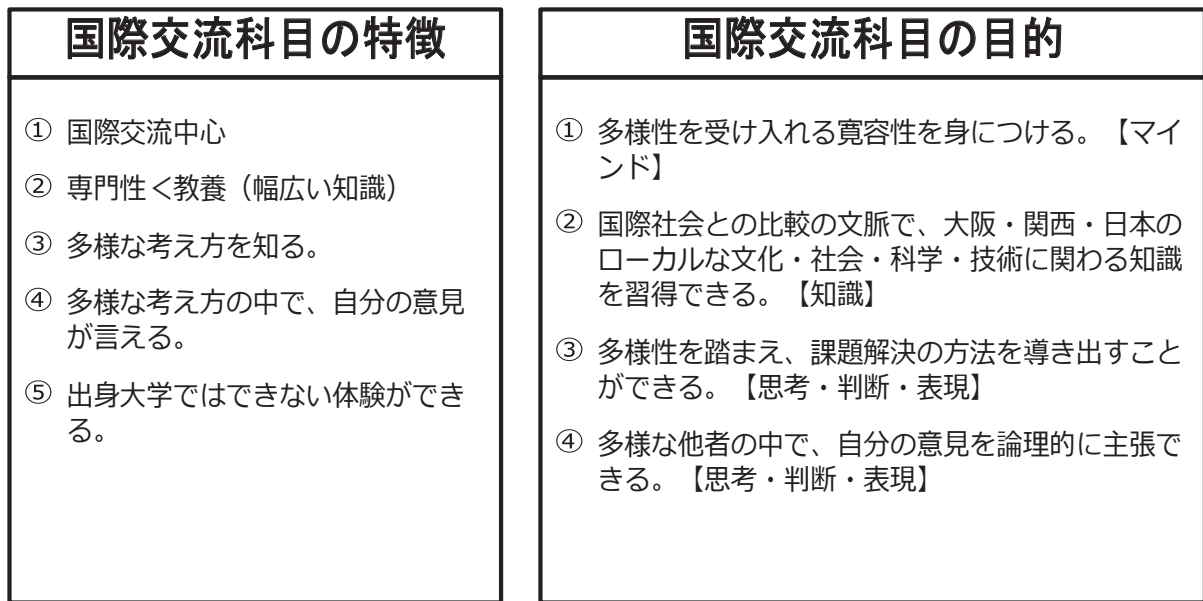


図3 国際交流科目の特徴と目的

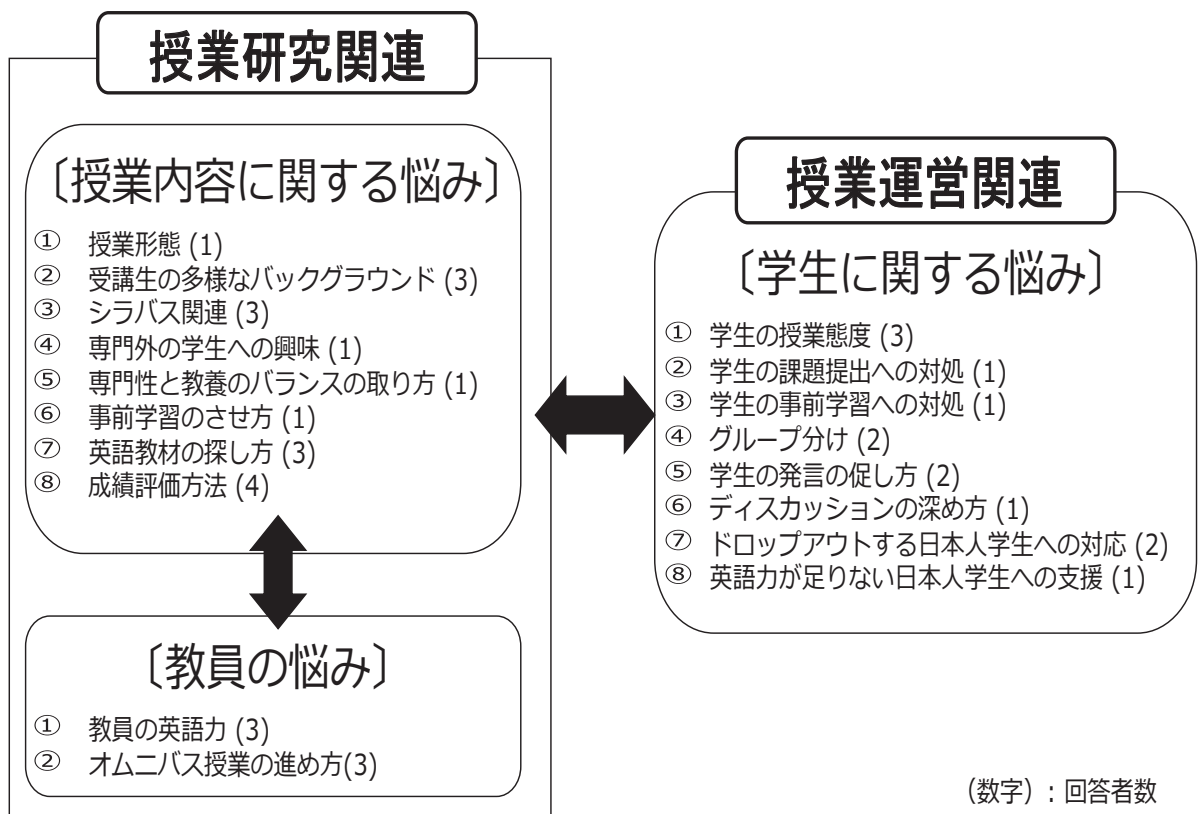


図4 国際交流科目担当者の悩みのまとめ

Q1 どういう授業形態がよいのか？ (1)

(数字) : 回答者数

◆: 先行研究の回答

<p>1. インタラクティブな授業にする</p> <p>① ディスカッションを導入する。 <ul style="list-style-type: none"> 授業中にディスカッションを一部導入。 (20名以下なら) 終始ディスカッション + 教員のフィードバック (全員に発言させながら進められる。15回中7~8回)。 </p> <p>② ワークショップを導入する (15回のうちの1~2回)。</p>	<p>2. いろいろな方法を組み合わせる</p> <p>例① 講義・読書 → 討論 → まとめ 例② 講義 → ワークショップ → 講義 例③ 討論 → レポート 例④ ミニ講義 → 討論 → まとめ</p>
<p>3. その他</p> <p>① 学生が興味を持つ話題、身近に感じる話題を取り入れる。 ② 先生の個性を出す。 ③ リーディング課題を導入する (事前課題にしてもよい)。 ④ 毎回の授業の進捗の確認。授業の最後にまとめがあるとよい。 ⑤ 日本人には日本語を使った予習も可とする。</p>	<p>参考文献</p> <ul style="list-style-type: none"> 中村俊樹 (編) 『大学教員のための教室英語表現300』 (アルク、2008) 中島英博 (編著) 『授業設計』 (玉川大学出版部、2016) “English as Medium of Instruction” 関連の文献

Q2 留学生の多様なバックグラウンドに配慮しつつ、授業内容を深めるには？ (3)

<p>1. 講義の工夫</p> <p>① 担当教員によるルールをしっかりと説明する。 ② 講義内容を工夫する。 <ul style="list-style-type: none"> キーワードや講義のポイントを明示する。 視覚教材を使用する。 主要な理論をわかりやすく要約する。 広く浅く、興味を引くような内容にする。 リーディング課題は少なくとも、2週間以前に周知 (配布が望ましい) する。 先生を交えたディスカッションなど、相手のレベルに合わせた情報提供の手法を取り入れる。 </p>	<p>2. 学生へのサポート</p> <p>① バックグラウンドの違いについて学ぶ機会を取り入れる。 ② 専門分野の知識のある学生が他の学生に説明する時間をつくる。 ③ 学生向けに、サポート教材を作成する。 例) クラスルーム・イングリッシュ (よく使うフレーズ) 集 ④ リアクションペーパーを活用する。 ⑤ グループワークの際、メンバーの入れ替えを行う。 ◆ 学生からの質問に適切に回答する。</p>
--	---

Q3 シラバスはどの程度詳細に、どのような内容を書くべきか？ (3)

<p>① 単位互換できるように教科書指定や詳細なシラバスを作成する。 ② 余白を残しつつ、何を目的としてどんな文献を用いた授業が分かるようにする。 ③ アピールポイントを明記する。 ◆ 評価基準を明記する。</p>
--

図5 授業内容に関するティーチング・ティップス

Q4 専門外の学生にも授業内容に興味を持たせるための工夫は？（1）

1. 簡潔で分かりやすくする	2. 学生が興味を持つテーマを選択
① 難しいことを簡潔に、素人に説明するように話す。 ② シラバス自体を、簡潔で分かりやすくする。	① 共通で話し合えるテーマを組み込む（具体例があると良い）。 ② 専門以外の学生に興味を持たせるために、身近な例を取り上げる。 例）科学なら遺伝子組み換えについてなど ◆ 異文化理解を促進するテーマを選ぶ。

Q5 専門性と教養のバランスの取り方はどうあるべきか？（1）

① 受講生の割合を見て、授業内容を柔軟に決定する。 ・ 学生によって内容を柔軟に変更する。 ・ 理系の学生は専門的な知識を学びたいかもしれないので、事前に確認する。
--

Q6 基礎的な知識を事前に学習してもらうべきか？（1）

① 予習は必須と考えているが、授業の最初に内容を確認するようにしている。 ② 学生が自習できるように、参考文献を挙げておく。 ③ 課題を読むことを宿題にする。 ④ 予習は必須ではない。

Q7 英語教材をどのように探せばよいか？（3）

1. 映像を取り入れる	2. ARCSモデル（学習意欲モデル）を活用する
① You Tubeを多く取り入れる。 ② 動画やICTを活用する。 <参考サイト> ・ Netflixの世界の“今”をダイジェスト ・ TED talks channel 英語教材の参考ウェブサイト howstuffworks（様々なトピックの英文記事を検索できるサイト）（ https://www.howstuffworks.com/ ）	① 新しい視点、問われて考えさせられる内容にする。 ② 学習内容が学生の実生活と結びついている課題を与える。 ③ 教員自身がおもしろいと思う内容にする。 ④ 普段できない体験をさせる工夫をする。

Q8 どのように成績評価すべきか？（4）

① 複数教員で評価を行う。 成績等のチェックはどうしても主観的になるので、複数で分担し、その痕跡を残す。 ② 他の教員の成績評価の例を紹介・共有する。 先生方が良いと思う教授法を共有する。 ③ 語学の授業ではないので、英語のレポートについては内容を重視する。

図6 授業内容に関するティーチング・ティップス（続き）

Q1 授業中の学生の睡眠・私語・スマホへの対応はどうすべきか？ (3)

- ① 事前にルールやペナルティーを決めておく（授業中の携帯電話、私語は禁止など）。
- ② 参加態度を成績評価に入れる。
- ③ ディスカッションだけでなく、ある問題に対する答えを時間内に出してもらって課題を与える。

Q2 課題提出状況の悪い学生にはどう対処すべきか？ (1)

- ① 教員が気にかけて話しかける。
（提出しないのではなく、提出できない理由があることも配慮する。）
- ② 授業終了後に全員分の課題を集める。

Q3 文献を読んでこない学生にはどう対処すべきか？ (1) （事前に目を通すことを促しつつ、授業で内容を確認したい）

- ① 授業中に文献を読む時間をつくる。
（例えば、5分間で英語が得意な人は英文600字、英語が苦手な人は200字程度読める。）

Q4 グループ分けをどのようにしたらよいか？ (2)

- ① 少人数グループのメンバーを毎回変える／席を移ってもらう。
- ② 毎回席をくじにする。
- ③ 属性が違うと思う者で組むよう指示するなど、グループ決めもワークの一部にする。

Q5 すべての学生に質問やコメントを積極的にしてもらうにはどのようにすればよいか？ (2)

- ① 2~4人くらいの小さいグループを作る。その後、全体で共有。
- ② 教員が意識して声をかける（自分のことを話したい学生は少なくない）。
- ③ 議論を独占する学生がいる場合は、「まだ発言していない人」などと指定して発言を求める。
- ④ ボールを回して、持った人に発言させる。

Q6 ディスカッション等において、学生の浅い知識を教え合うような形にならないようにするにはどうすればよいか？ (1)

- ① TAや教員がディスカッションに介入する。
- ② KOANやオンライン掲示板を活用する。
- ③ グループでの話し合い結果を授業後に提出させてチェックし、フィードバックをする。

図7 学生に関するティーチング・ティップス

Q7 日本人学生のドロップアウトを食い止め、単位を取得させるにはどのようにすればよいか？ (2)

- ① 日本語の参考文献を多く挙げる。
- ② 日本語による期末レポートを可にする。
- ③ 英文レポートを課す場合、ページ数を少なめに設定する。

Q8 英語力が足りない日本人学生をどう支援するか？ (1)

- ① 日本人学生の理解度を確認しながら授業を進める。
- ② 説明にジェスチャー、絵、映像などの視覚教材を取り入れる。
- ③ 日本に関するテーマ、わかりやすいゲーム等を取り入れてディスカッションを行う。
- ④ ディスカッションに入る前に、個人で考える時間を与える。
- ⑤ 英語が苦手な学生でも参加しやすいグループワークを工夫する。
- ⑥ 教室でのディスカッションに加え、ネットの掲示板でのやり取りを可能にする（CLEやLINEオープンチャット等）。
- ⑦ 文献に英語の和訳をつける。
- ⑧ 難しい英単語や専門用語には日本語訳をつける。
- ⑨ 授業後に教員やTAが日本語で対応する。
- ⑩ 英語が得意な留学生に「英語をゆっくり話してほしい」など、英語が苦手な学生に配慮するよう伝える。
- ⑪ 英語による人間関係の構築手法についても教えてあげる（初対面の人との関係構築方法など）。

図8 学生に関するティーチング・ティップス (続き)

Q1 教員の英語力が不十分で授業に自信が持てない場合、どうすればよいか？ (3)

- ① わかりやすい単語を使って、英語を話す。
・受講生の多くは非英語圏出身の学生なので、わかりやすい簡単な英語の使用が推奨されている。
- ② 授業前に十分にリハーサルを行う。
 - ◆ 大きい声で、発音が明瞭で聞き取りやすい英語を話す。
 - ◆ 完璧な英語を目指さない。

<参考文献>

・中村俊樹（編）『大学教員のための教室英語表現300』（アルク、2008）

Q2 オムニバス授業の進め方はどのようにすればよいか？ (3)

- ① 様々な教員から学習できる等、オムニバスの良さを活かす方法や授業スタイルを考える。
- ② 時間があれば、他の教員の授業を見学してみる。
- ③ 代表の教員がグラフィックシラバス等を作成して、授業の内容と構成を整理しておく。
- ④ オムニバス形式の良い例があれば、共有する。
例) COデザインセンターの「コミュニケーションのいろは」など

図9 教員の悩みに関するティーチング・ティップス

4-1 授業内容に関する悩み

授業内容については、8つの悩みに分類することができた(図5、6)。今回、国際交流科目を担当する際の悩みで最も多く挙げられたのが、授業内容に関するものであった。特に、「受講生の多様なバックグラウンド」、「シラバス関連」、「英語教材の探し方」、「成績評価方法」について困難を感じる回答が比較的多く見られた。また、解決策については、授業形態、講義の工夫、学生のサポートに関する回答が多く得られ、担当者の関心の高さをうかがうことができた。先行研究で書かれていた、視覚教材の使用やコミュニケーションの手段を増やすといった点については、回答データでも見られた。一方、「学生からの質問に適切に回答する」、「明確な評価基準を提示する」、「異文化理解を促進するテーマを選ぶ」に関する回答は参加者からは得られなかった。国際交流科目の受講者の多くは、受講生同士の交流や、異文化理解の促進を期待している(中野ら、2020; Nakano et al., 2020)。そのため、インタラクティブな授業形態や、異文化理解が促進されるようなテーマの選択は考慮すべき点であると思われる。

4-2 学生に関する悩み

学生についても、8つの悩みに分類できた(図7、8)。その中でも、「授業中の学生の睡眠・私語・携帯電話使用」に関する悩みが最も多かった。これ以外にも、学生の課題提出状況など、通常授業と同様の悩みが多く挙げられた。ただ、グループ分けに関しては、様々なバックグラウンドの学生が受講するため、同じ言語を話す学生が固まらないようにするなどの配慮が必要になるだろう。

解決策については、「英語力が足りない日本人学生への支援」に関する回答が多く、担当教員が様々な工夫をしている様子がうかがえる。国際交流科目は、多くの日本人学生にとって必修科目ではないため、途中でドロップアウトする学生が通常授業よりも多い。留学生は日本人学生との交流を望んでいるため、日本人学生への支援や受講へのモチベーション維持も国際交流科目担当者の課題の一つとなっている。このように、本研究結果から、国際交流科目特有の悩みが浮かび上がったといえるだろう。今後は、国際交流科目の必修化の検討や、英語教員との連携を図ることで、受講生のモチベーションの維持、ひいては国際交流科目の質の向上にも繋がるとと思われる。

4-3 教員の悩み

教員の悩みについては、「教員の英語力」と「オムニバス授業の進め方」という2つの大きな悩みが挙げられていた(図9)。「教員の英語」に関しては、先行研究で述べられている点が、FD研修の解決策として出てこなかったため、図に追記した。ここから、国際交流科目担当者の多くが「完璧な英語を話さなければいけない」とプレッシャーを感じているように思われる。中井(2009)は、「完璧な英語を目指さない」ことの重要性を指摘している。さらに、中野ら(2020)は、中井(2009)を参考にしながら、英語使用に不安を感じる教員が、授業満足度の向上のために考慮すべき6点を挙げている。具体的には、1) 双方向型の授業を工夫する、2) 学生からの質問に適切に回答する姿勢を示す、3) 視覚教材を利用する、4) 様々な方法を利用して学生とのコミュニケーションを大切にする、5) 堂々とした態度でかつ明瞭で聞き取りやすい声の大きさと話す、6) 授業計画や評価基準等の授業の見通しを明確に提示する、である。今後、英語による授業の担当教員にこれらの点を伝えることが、彼らの負担軽減につながると思われる。

オムニバス授業の進め方に関する悩みも、国際交流科目特有であると思われる。「専門性よりは教養(幅広い知識)」や英語による授業実施の負担という国際交流科目の特徴のために、オムニバス形式の国際交流科目が多く開講されているが、同時に悩んでいる回答も多く見られた。オムニバス形式については、英語による授業関連の先行研究でも扱われておらず、今後調査すべきテーマだと思われる。

5 まとめと今後の課題

本稿では、国際交流科目の担当教員が抱える悩みについて、2回のFD研修で得られた回答を、18のカテゴリーと3つの大カテゴリー、2つの最終のカテゴリーに分類することができた。さらに、それらの悩みに対する解決策を先行研究およびFD研修の参加者から得られたデータを用いて整理し、「英語で国際交流科目を教えるためのティーチング・ティップス」を図示することができた。

今回、FD研修での回答データだけでなく、先行研究や国際交流科目の授業評価アンケート結果と合わせて、国際交流科目担当者の悩みに対する解決策を

整理できたことは有意義であると考えている。将来的には、今回図示した、「英語で国際交流科目を教えるためのティーチング・ティップス」をホームページ上で公開したいと考えている。また、悩みの分類をFD研修のテーマを考える際に活用することも計画している。そして、このティップス集が、将来の国際交流科目担当者をはじめ、英語で教養科目の授業を担当するすべての教員にとって少しでも役に立てば幸いである。

最後に、今後の課題について述べる。まず、本稿では、FD研修の参加者の回答という限られたデータしか収集することができなかった。特に、解決策については、FD研修に参加の必要がないベテラン教員の回答を収集する必要があると思われる。多忙な担当教員にできるだけ負担をかけずに回答の協力を得る方法を、これから考える必要がある。また、各回答は付箋に書かれた短文であったため、具体的な内容までは聞くことができなかった。今後は、アンケート調査やインタビュー調査を実施し、より包括的に調査を進めたい。さらに、国際交流科目のさらなる質の向上のためには、担当教員・TAへのティップスだけでなく、受講学生へのラーニング・ティップスについても作成をする必要がある。これらのことは今後の課題とし、別稿で論じる。

謝辞

「英語で国際交流科目を教えるためのティーチング・ティップス」の作成にあたり、全学教育推進機構教育学習支援部の佐藤浩章准教授より、4月FD研修の実施の他に、何度もミーティングの時間をとっていただき、FD研修やティーチング・ティップス集作成のアドバイス等、多大なご協力をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

参考文献

- Nakano, R., Ito, S., Nakamaru, N. & Kondo, S. (2020) Factors that Determine the Satisfaction of Classes Taught in English in Japan: A Fundamental Analysis of 9 Years of Class Evaluations by Japanese Students. presented at: 3rd WCCES (World Council of Comparative Education Societies); November 26, 2020; Online (Portugal).
- 阿久津洋巳 (2014) 「授業評価アンケートは何を評価しているのか」『岩手大学教育学部附属教育実践総合セ

- ンター研究紀要』13, 245-252.
- 太田浩 (2011) 「大学国際化の動向及び日本の現状と課題：東アジアとの比較から」『メディア教育研究』8, 1-12.
- 北浜榮子・近藤佐知彦 (2002) 「大阪大学短期留学特別プログラム OUSSEP のアンケート評価からの考察—英語による講義の問題点と可能性」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』6, 93-112.
- 木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究方法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて—』弘文堂
- 栗田聡子 (2017) 「英語による授業『Media and Japan』における課題と考察」『三重大学国際交流センター紀要 Bulletin of Center for International Education and Research, Mie University』12, 165-178.
- 中井俊樹 (2009) 「英語による授業のノウハウの明示化」『名古屋高等教育研究』9, 77-89.
- 中野遼子・伊藤駿・近藤佐知彦 (2020) 「日本における英語授業に対する満足度—留学生による9年間の授業評価アンケートの分析を中心に」『未来共創』7, 221-240.
- 早瀬博範 (2017) 「『留学支援英語教育カリキュラム』の成果と課題—佐賀大学教養課程でのグローバル人材育成の試み」『佐賀大学全学教育機構紀要』5, 99-114.
- 星野敦子・牟田博光 (2003) 「大学生による授業評価にみる受講者の満足度に影響を及ぼす諸要因」『日本教育工学会論文誌』27, 213-216.
- 牧野幸志 (2005) 「学生による授業評価の規定因の検討(4)—授業概要の認知度が授業評価に与える影響」『経営情報研究』12(2), 1-20.
- 文部科学省 (2020a) 「『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学者数』等について」(2020/12/15アクセス) https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692.htm
- 文部科学省 (2020b) 「平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」(2020/11/15アクセス) https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt_daigakuc03-000010276_1.pdf
- 山川健一・平本哲嗣・松岡博信・三宅英文 (2015) 「留学の事前指導と事後指導の一環としての英語による大学の授業」『安田女子大学紀要』44, 181-190.
- 山本雄一郎 (2011) 「大学の英語による専門科目の授業実施の課題と方向性—母語話者教員と非母語話者教員の比較」『明大商学論叢』93, 73-90.